

七面山大崩れに関する歴史的考察

-----身延山の文献・古文書に見る-----

東京農工大学 ○永井 修・中村浩之

はじめに

七面山（標高 1892m）は山梨県南西部、糸魚川-静岡構造線の西側に位置し、その東西両斜面に大崩壊地を抱えている。特に東側の播り鉢状の崩壊地は「七面山大崩れ」と呼ばれ、安政東海地震（1854年）によって崩壊したという説がある。しかしながら、この説の根拠は薄く文献、古文書において適確に説明されたものはなく、物理的証拠も明らかにされていない。今回、身延山大学の協力で、これまであまり一般には目の触れることのなかった久遠寺の文献や古文書を開示していただき、七面山大崩れと安政東海地震との関係を検証したので報告する。

1 古文書に見られる「ガレ」と崩壊地の関係

身延山の古文書には「ガレ」という語が多く見受けられる。「ガレ」とは、広辞苑によれば静岡、山梨地方で古くから使われている言葉で崩壊地を指し、大規模な崩壊地から小さな「ガレ場」まで広範囲に使われている。

1.1 「安政東海地震説」の根拠となった「ガレ」

「安政東海地震説」は新砂防の報告（森山、1986）にも見られるが、この報告の根拠となったものは富士川砂防工事事務所が行った地震時崩壊危険区域調査報告書（1982）によるものと推察される。この中では、久遠寺と近隣の村との間で幾度も起きた七面山における地領境界争いの記述を引用している。争いの度に変化している久遠寺の地領範囲、境界を示す地名に、地震を挟んだ1818年と1865年では地震後の1865年の方が「ガレ」という言葉が多用されていることを理由に、大崩れは安政東海地震によるものと推論づけている。しかし、地震以前の久遠寺の地領境界記録を見ると、図-1のようにその境界は七面山の山麓、春木川まで達し、「ガレ」のあまりない場所がほとんどであるのに比べ、地震後の地領境界は「ガレ」の多く存在する山頂附近の遷急点近くにある。つまり、境界が「ガレ」の多く存在する場所に移ったために「ガレ」が多用されているのではなかろうか。

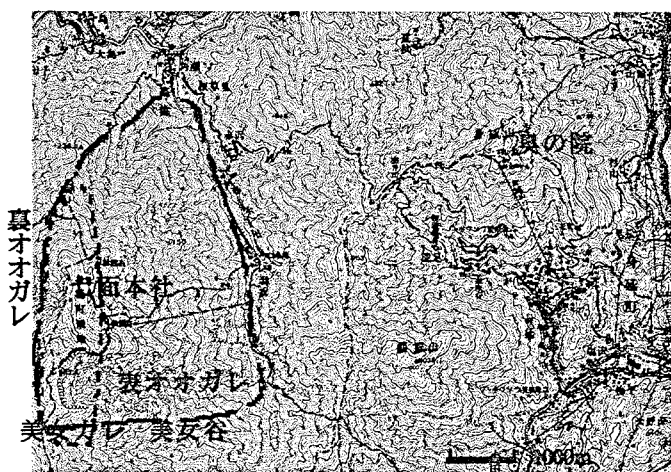


図-1 七面山の久遠寺地領境界（身延 1/50000 に加筆）
—— 1818年 -----1865年

○美女ガレは現在のタル沢の北にあり、オオガレに接していると思われる。

○境界表示に使われた地名

1818年：春木川、雨畑山境、高住境、美女谷

1865年：表大ガレ、峰境とは真大ガレ、美女ガレ

1.2 七面山に「ガレ」が使われ始めた年代

『日蓮聖人遺文』の中には、建治4年（1278）の「四條全吾殿御書」として、「鷹取のたけ（嶽）身延のたけ、なないた（七面）がれのたけ、いいだに（飯谷）と申し、木のもと、かや（萱）のね、いわの上、土の上、いかにたづね候へどもをひて候ところなし」とあるところから、当時から「ガレ」という言葉は使われていたことは明らかである。また、寛文6年（1666）深草元政によって著された『七面大明神の縁起』の中に、「是の山七面を開いて、其の鬼門を鎖せり。故に七面山と云う。神明此に迹を垂る。故に七面大明神と云う。是の山しゅっ乎として碧落に徹り、截然として削り成すが如し」とあり、七面山には1600年代にすでにかかなりの急崖が形成されていたことが推察される。この他、慶安四年（1651）の久遠寺地領記述にも「オオガレ」という言葉が使われている。

1.3 「オオガレ」はいつ頃から存在したのか

図-2は弘化四年(1847)に出版された『法華宗門目録』に掲載されている身延山図経(上)の一部、七面山の図である。この図は恐らく身延奥の院から眺めた七面山と思われるが、朝陽洞と呼ばれ現在の「大崩れ」に似た形状をなしている。このように誇張されて描かれた「オオガレ」は、当時からかなり大規模な崩壊地であったろうと思われる。頂部はオーバーハング状にも見受けられるが、2度の大地震で崩落した可能性もある。出版は1847年であるが、絵図はもっと早い時期、寛保年間(1741-1743)に描かれている。

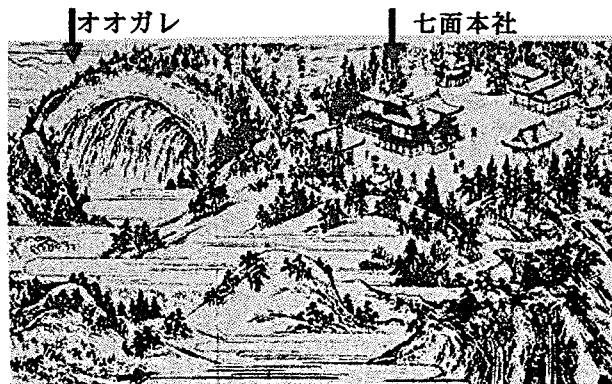


図-2 1847年頃の七面山(身延山図経より)
身延山大学付属図書館所蔵

2 身延山の地震災害記録

七面山を含む久遠寺地領内での出来ごとは、『身延山坊跡録』、『身延山諸堂記』、『身延山再建諸堂記』、『身延山歴代略譜』などに細かく記述されている。当時の知識階級とも言える僧達が久遠寺という組織の中で残したものであるから、その内容については大いに信頼でき、特に災害についての記録は地震、火災、洪水など細やかである。したがって、これらの文献から地震の被害状況を検証してみる。

2.1 宝永東南海地震(1707年)、安政東海地震(1854年)の被害

『身延山歴代略譜』によれば、宝永東南海地震の被害について「宝永四丁亥年十月四日未ノ刻同五日辰ノ刻諸国大地震ナリ高浪横死等数多当山内諸堂大損諸諸大破横死モ十八人ナリ」とあり、安政東海地震の被害は、「大地震嘉永七年寅年十一月四日辰ノ下刻諸国横死多ク山内モ七人アリ諸所大破損通本ヨリ東谷へ大破西谷小破ス」とある。損害は表-1のとおりである。

表-1 宝永、安政地震における久遠寺地領内の被害

	死者	家屋の被害	崩壊場所
宝永地震	18人	久遠寺(全壊7、半壊2) 坊(全壊4) 奥の院(全壊1)	東谷山崩れ、裏山崩れ
安政地震	7人	久遠寺(全壊7、半壊3) 坊(全壊7) 奥の院(全壊2) 七面山(全壊1)	石積崩れ、地形下ル

しかしながら、地領内の山腹崩壊について、これらの記録には一部境内の石垣の崩壊や堂裏の小規模な崩壊についての記述はあるが、大規模な崩壊について一言も触れていない。七面山についても、多くの災害記録があるにもかかわらず、「鐘堂嘉永七申寅十一月四日ノ大地震而皆潰」としか記されていなく、大規模崩壊のあった形跡がない。もし安政地震時に大崩壊があったとすれば、春木川沿いの橋や坊に被害が及んでいるはずである。

3 まとめ

以上の点から、七面山大崩れは安政東海地震以前、それもかなり前から崩壊していたと考えられる。大崩壊のメカニズムは岩盤クリープ説が有力であるが、褶曲、断層破碎を受けた砂岩、粘板岩の互層の崩壊地は、その後の大地震の度に頂部が大きく後退し、凍結・融解による表層崩壊をくり返し、大雨が崩落土砂を流送するという過程を経て、現在の形状に至ったのではないかと考えられる。今後予想される東海地震の発生に対して、七面山大崩れの崩壊メカニズムを検証し、災害防止への対応を考えていく必要がある。

最後に、今回多くの文献・古文書を開示していただき、御指導を賜った身延山大学の宮川了篤教授、付属図書館の奥野課長、JA早川の望月組合長に深く感謝申し上げる次第である。

参考文献：身延山坊跡録、身延山諸堂記、身延山再建諸堂記、身延山歴代略譜、七面大明神縁起、身延鑑、身延山史、身延山図経、地震時危険区域調査報告書 他